

公益財団法人リバーフロント研究所 代表理事の塚原です。

当研究所の研究発表会にアクセスいただきまして誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症の流行のため、昨年を引き続きまして今年もオンラインで開催させていただくことといたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年のご挨拶でも申し上げましたが、温暖化にともなう水災害の激甚化に対応して治水対策の基本方針がいわゆる「流域治水」へと大きく転換されています。

それとともに、リバーフロント研究所が取り組む河川環境や流域の生態系、水辺のまちづくりなどの課題も大きな変革を求められています。

水災害への対策を流域一体として取り組むことと同時に、流域の自然環境の保全・再生、流域治水へのグリーンインフラ活用、まちづくり・地域づくりなども含めて一体となったソリューションを追求していかなければなりません。

リバーフロント研究所としましても、このような「流域治水」の時代への対応を強く意識した取り組みを進めているところですので、この研究発表会を通じてその一端をご紹介させていただきたいと思っております。

今回の基調講演は、ヨーロッパ特にドイツ・スイスの取り組みをテーマに東京大学の池内先生にお願いしました。

昨年も今年も新型コロナウイルス流行のため中止せざるを得ませんでした。一昨年はリバーフロント研究所が事務局を務め学識者の皆様による欧州現地調査を実施いたしました。

池内先生にもこの調査団に参加していただいたわけですが、その折りの知見などもベースとして今回ご講演をいただきました。

欧州でこれまで試行錯誤しながら取り組まれてきている近自然川づくりや氾濫原管理の取り組みは、我が国における多自然川づくりなどの取り組みのモデルともなってきましたが、さらにこれからの「流域治水」の取り組みという面からも大いに学ぶべきところがあるものと思っております。

また、今年度から滋賀県立大学の瀧先生に当研究所の技術参与にご就任いただいております。

瀧先生には、流域全体をモデル化した水理解析を実施し、流域治水対策と自然環境対策を一体として検討するための研究を始めていただいているところですが、その研究の近況を先生からご紹介いただくこととしています。

さらに、今年度は「水辺の国勢調査」が始まって30年という節目に当たります。

河川環境の取り組みの大きな下支えとなってきたこの「水辺の国勢調査」のこれまでの成果を振り返り、今後の展開・展望を示していくことは、これからさらに流域全体に視野を広げていくうえで極めて重要だと思います。

いずれにしても、今回ご紹介する内容は、まだまだ踏み出したばかりの新しい取り組みも多いところですが、今後のリバーフロント研究所が取り組むべき大きな課題ばかりであると思っています。

是非多くの皆様にご視聴いただき、ご批判・ご意見を寄せていただけるとありがたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。